

2020. 3. 22 第四主日礼拝

ヨハネ 13:1-15 「足を洗うイエスさま」

聖書

- 1 さて、過越の祭りの前のこと、イエスは、この世を去って父のみもとに行く、ご自分の時が来たことを知っておられた。そして、世にいるご自分の者たちを愛してきたイエスは、彼らを最後まで愛された。
- 2 夕食の間のこと、悪魔はすでにシモンの子イスカリオテのユダの心に、イエスを裏切ろうという思いを入れていた。
- 3 イエスは、父が万物をご自分の手に委ねてくださったこと、またご自分が神から出て、神に帰ろうとしていることを知っておられた。
- 4 イエスは夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。
- 5 それから、たらいに水を入れて、弟子たちの足を洗い、腰にまとっていた手ぬぐいでふき始められた。
- 6 こうして、イエスがシモン・ペテロのところに来られると、ペテロはイエスに言った。「主よ、あなたが私の足を洗ってくださるのですか。」
- 7 イエスは彼に答えられた。「わたしがしていることは、今は分からなくても、後で分かるようになります。」
- 8 ペテロはイエスに言った。「決して私の足を洗わないでください。」イエスは答えられた。「わたしがあなたを洗わなければ、あなたはわたしと関係ないことになります。」
- 9 シモン・ペテロは言った。「主よ、足だけでなく、手も頭も洗ってください。」
- 10 イエスは彼に言われた。「水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身がきよいのです。あなたがたはきよいのですが、皆がきよいわけではありません。」
- 11 イエスはご自分を裏切る者を知っておられた。それで、「皆がきよいわけではない」と言われたのである。
- 12 イエスは彼らの足を洗うと、上着を着て再び席に着き、彼らに言われた。

「わたしがあなたがたに何をしたのか分かりますか。

13 あなたがたはわたしを『先生』とか『主』とか呼んでいます。そう言うのは正しいことです。そのとおりなのですから。

14 主であり、師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのであれば、あなたがたもまた、互いに足を洗い合わなければなりません。

15 わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、あなたがたに模範を示したのです。

はじめに

今日は受難節の第四回目のメッセージであるとともに、今年度の豊田教会における最後の礼拝奉仕となりました。この一年、教会も牧師も戦いの中を通過して来ましたが、愛兄弟のお祈りとご愛によって支えられ、乏しい奉仕ではあっても全うできましたことを深く感謝申し上げます。今年度は新型コロナウイルスの影響で教団年会は延期となりましたが、3/27に任命が行われ新たな任地が発表されます。今こうして主のあわれみによって一年間の奉仕を終え、主の御前に立たせていただける恵みを感謝しています。この朝はイエスさまの受難とともに離任の意を込めた礼拝として、ご一緒にみことばに心を向けさせていただきましょう。

1. ご自分の時

先週の礼拝（一粒の麦のお話）の中で、イエスさまは「ご自分の時」をいつも思って行動しておられたことを学びました。時を表わすギリシア語はクロノスとカイロスが使われることは以前にもお話しました。クロノスは「時の流れ」や「期間」を表し、カイロスは「定まった特定の時」を表します。イエスさまが公生涯をスタートさせたとき、「時が満ち、神の国が近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」（マルコ 1:15）と語られた「時」はカイロスです。カイロスには特別な「時」の意味が込められているのですが、なぜかヨハネは 13:1 の「ご自分の時」をカイロスではなくホーラという別のことばで表しています。

ホーラは本来季節や時期を表わすことばだそうですが、そこにはヨハネの独特の視点があるように思われます。このホーラはヨハネ 16:21 で「女は子を産むとき、苦しみます。自分の時が来たからです。しかし、子を産んでしまうと、一人の人が世に生まれた喜びのために、その激しい痛みをもう覚えていません。」とあるように、産みの苦しみの時を指すことばとして使われています。つまり、ヨハネは 13 章の洗足の出来事を、十字架の産みの苦しみの始まりと位置付けているように思えるのです。「ご自分の時が来たことを知っておられた。」(1 節) とは、想像を絶する激しい苦しみの幕が今まさに開けようとしている、その瞬間を指していると言えるのです。なぜなら、この洗足の出来事は十字架の前日、木曜日の夕方出来事だったからです。イエスさまは洗足から十数時間後の金曜日午前 9 時にはもう十字架にはりつけにされています。まさに洗足の出来事をもって十字架の苦しみの幕が切って落とされたと言っても過言ではありません。

2. ご自分の者を最後まで愛する

もし私たちが地上で自分に残された時間があと十数時間だとしたら、何を考え、どう行動するでしょうか。アップルの創業者であるスティーブ・ジョブズ氏は「もし今日が人生最後の日だとしたら、今やろうとしていることは本当に自分のやりたいことだろうか？」という名言を残しています。私は自分の終わりが見えたとき、いったい何をするだろうかと考えさせられます。イエスさまはどうだったのでしょうか。「世にいるご自分の者たちを愛してきたイエスは、彼らを最後まで愛された。」(1 節) とあります。ここには、2 つのキーワードがあります。一つは「ご自分の者たち」であり、もう一つは「最後まで愛された」です。

イエスさまにとって「ご自分の者たち」とは誰でしょうか。真っ先に思い浮かぶのは弟子たちです。イエスさまの周りには多くの弟子や女性たちがいて、イエスさまの生涯に付き従ってきました。その中でも 12 弟子は特に近い存在として寝食を共にしてきましたから、ここで言う「ご自分の者たち」の

筆頭に上げられるでしょう。しかし、「ご自分の者たち」とは弟子たちのことだけを言っているのではないように思います。ヨハネ 1:10, 11 に「この方(イエスさまのこと)はもともとから世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。この方はご自分のところに来られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった。」とあります。このことばをあてはめるなら、「ご自分の者たち」とはイエスさまを拒絶した人たちも含まれていることとなります。イエスさまは、神の最も近くにいるユダヤ人たちにご自分を救い主として現わして来られたのですが、彼らには受け入れられませんでした。その最たるものが宗教指導者たちの陰謀による十字架刑であったわけですが、それにもかかわらず彼らを愛する姿をここに示されたのです。

その愛を今「最後まで」表そうとしておられることに深い感動を覚えます。「最後まで」とは「極みまで」という意味で、質において量において、これ以上ないという形で愛を示されたのです。もし自分に十数時間しか残されていないなら、イエスさまの姿に倣って愛を表わす者でありたいと願います。聖書がいう愛は感情ではありません。行動となって注ぎ出されるものです。それが弟子の足を洗うという行為に繋がっているのです。イエスさまの洗足の出来事だけを真似るのではなく、その行為の背後にある「最後まで愛された」愛に倣いましょう。そこには仕える者の姿があるのです。

3. 足を洗うイエスさま

イエスさまの仕える者の姿が弟子の足を洗う行為となって表れました。この場面では弟子のイスカリオテ・ユダはすでに祭司長たちから銀貨 30 枚を受け取り、イエスさまを引き渡す機会を狙っていました。ユダも含めイエスさまは上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとい、たらいに水を入れて弟子たちの足を洗い、布でふき始められました。ペテロは自分の番になったときイエスさまに足を洗ってもらうことに躊躇します。しかしイエスさまは「わたしがしていることは、今は分からなくても、後で分かるようになります。」(7 節)と言われ、ペテロの足を洗われました。弟子たちの足を洗うと、上着を

着て彼らに「わたしがあなたがたに何をしたのか分かりますか。」(12節)と尋ねられました。足を洗うことは当時の奴隷の仕事です。身をかがめて人の足を洗う姿はまさしく奴隷と同じ姿であり、仕える者の姿そのものです。

牧師としてこの一年を振り返るとき、愛する皆さんにどこまでお仕えできたのか自分ではわかりません。正直イエスさまのようにお仕えできたとはとても思えません。それにもかかわらず、愛と忍耐を持って牧者を支えてくださったことに深く感謝いたします。豊田の地を離れ、次なる任命を頂こうとしている今、気持ちの上ではイエスさまと同じように愛する兄弟の足を洗わせて頂いています。「ほんとうにありがとうございました」という感謝でいっぱいです。

4. 互いに愛し合いなさい

イエスさまが弟子の足を洗われたことには模範を示すという意味がありました。「主であり、師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのであれば、あなたがたもまた、互いに足を洗い合わなければなりません。」(14節)と言われ、互いに仕え合うこと、互いに愛し合うことの模範を示されたのです。12人の弟子たちはみな個性派ぞろいでした。誰がイエスさまの一番弟子なのか議論するような関係であり、他の弟子よりも自分が上に行きたいと思っている者に、仕えるという発想はなかったでしょう。そんな彼らに今は分からなくても、仕えるとは、愛するとはこういうことであるとモデルを示されたのです。

洗足の出来事後、イエスさまは弟子たちと最後の食事(最後の晩餐)を共にし、後の聖餐の制定のもとになるパンとぶどう酒を配られました。その中でイスカリオテのユダの裏切りを予告され、「わたしがパン切れを浸して与える者が、その人です。」(同 13:26)と言って、イスカリオテのユダにパン切れを渡されました。ユダがパンを受け取ると彼にサタンが入り、イエスさまを祭司長たちに引き渡すために立ち上がるのです。イエスさまはユダが出

て行き残された 11 人の弟子に向かって「わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」(同 13:34) と、洗足の意味を説かれました。愛があるところにわたしも共にいると言われたイエスさまは、互いに愛し合って生きる道を示してくださったのです。このときユダはもういません。しかし、互いに愛し合うというとき、ユダのことも念頭に置かれているのではないかと思います。なぜなら、祭司長たちを連れてイエスさまの前に現れたユダに対して、イエスさまは最後のことばとして「友よ、あなたがしようとしていることをしなさい。」(マタイ 26:50) と語られました。ご自分を裏切り十字架に追いやるきっかけを作ったユダに、「友よ」と呼びかけるイエスさまの姿は、「自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。」(マタイ 5:44) と語られたことと重なります。

私たち人間はこのような大きな愛、すなわち神さまの愛を持ち合わせていない者です。もとより神さまに背を向け、背いて来た罪人です。そのような者のためにイエスさまはいのちまで捨てて愛してくださり、罪の世界からいのちの世界に救い出してくださったのです。このイエスさまの愛で私たちが互いに愛し合うなら、そこに神の国は到来するのです。互いに仕え合うことをもって互いに愛し合う関係を築いて行きましょう。それを何より願っておられるのはイエスさまであり、そのために今日もイエスさまはすべての人間に働きかけておられるのです。「互いに愛し合いなさい」と。

まとめ

イエスさまは弟子たちの足を洗われました。今、私たちの足をご自分の十字架の血で洗ってください感謝します。十字架の血はイエスさまの愛のしるしです。その愛をもって私たちも互いに仕え合います。教会の内外において互いに愛し合う幸いを広めて行きましょう。主の前に互いに愛し合うことを約束して、この一年を締め括ります。